

日中戦争期の音楽にみる「大陸」表象  
— 満洲国民音楽の模索と音楽ジャンル観の関連から —

葛西 周 (東京芸術大学)

kasai.amane@ms.geidai.ac.jp

1. はじめに

1-1 本発表の目的

本発表は日中戦争期の満洲の音楽を対象とし、「大陸」において／「大陸」をめぐるどのような表象が実践されていたかを明らかにしようとする試みである。

満洲国建国から支那事変を経て、戦況の悪化とともに満洲国民音楽の創出が急務とされていた中、そのときどきの社会状況に従って音楽ジャンル観は目まぐるしい変化を余儀なくされていた。既存の満洲音楽に関する研究は単一の音楽ジャンルごとに進められてきたが、それに対し本発表は当時の新聞雑誌に掲載された言説を参照しながら諸ジャンルの位置づけを比較考察することで、戦時下日本の音楽政策とジャンル観のあいだの歪みを読み解く。

1-2 発表者によるこれまでの関連研究と問題意識

①植民地文化戦略における音楽の研究

- ・台湾高砂族舞踊上演における同化と異化の交錯 (葛西 2008)

1935年の始政四十周年記念台湾博覧会において、音楽堂・演芸館・文化施設館にて計8回実施 (パイワン族、アミ族、タイヤル族が参加)

プログラムには「蕃人舞踊」「蕃歌」と「新舞踊」が混在

= 日本の植民地政策における文化統合過程の中で推進されていた「同化」と、

植民地をエキゾチックなものとして眼差し消費する「異化」の双方を顕示

⇒ 満洲において現地の音楽はどのように扱われていたのか?

②戦時下の音楽をつうじた国民教化に関する研究

- ・音楽を用いた体操・遊戯の採用

学校教育において戦争と関連した内容を持つ音楽体操・唱歌遊戯の実践が増加

→ とりわけ祝祭空間において、成人に対しても集団での音楽体操・唱歌遊戯

= 「伝統的」な身体を「近代的」な身体へと変換する際のツールとして音楽が機能

+ 同じ時間・同じ音楽に合わせて・同じ動きをすることが集団意識を高める

- ・「美談」を伝えるメディア

歴史上の「偉人」や軍人の神格化

→ 特に日露戦争以降、「美談」が軍歌や唱歌に組み込まれるように

+ 戦死者が増えると「死」や「犠牲」を題材にした軍国歌謡が増加

⇒ 満洲ではどのような音楽が時局に適切であると考えられたのか?

2. 先行研究および満洲音楽史概略

2-1 「大陸」における音楽活動

- ・在満オーケストラの活動 (岩野 1999)

白系露人中心の哈爾濱交響楽団、内地人を招聘した新京交響楽団の設立

- ・満洲唱歌制定 (喜多 2003)

教科書編集をおこなっていた南満洲教育会が内地の唱歌とは異なる独自の曲を内地の作詞家作曲家に委嘱 (北原白秋と山田耕筰による《まちぼうけ》《ペチカ》など)

- ・外地での邦楽公演・素人への教授 (仲 2011)

1935年宝生流能楽公演に際する大連能楽殿の新築・紙面上の素人義太夫人気投票

- ・満映製作映画の劇中音楽 (四万田 2011 ほか)

李香蘭に従順でエキゾチックな中国人ヒロインを演じさせ、劇中歌が流行

2-2 「大陸」を素材とした作品の製作

- ・満洲事変を契機とした、満洲を題材とする作品の増加

Ex.) 歌舞伎『満洲事変』(1932)、宝塚少女歌劇『満洲より北支へ』(1938)

+ 戦況の悪化に伴い、「闘ふ満洲」をテーマとした作品を新京音楽院が内地に委嘱

- ・歌謡曲における「他者」としての中国人表象 (ポーブ 1999、2005)

「他者」の存在を排除し「自我」に焦点を当てた軍国歌謡・「移民もの」

／「他者」の歓迎を受ける「自我」を描く「たよりもの」

／エキゾチックな「他者」を描く「娘もの」(≒大陸メロディ)

Ex.) ヨナ抜き音階、二胡や月琴を模倣したヴァイオリンやバンジョーの音色

2-3 藝文の発足

- ・藝文の文化統制活動

1941年3月国務院総務庁弘報処が藝文指導要綱を公布、体系的な芸術統制を計る

【資料1】『藝文指導要綱』趣旨

「文化ノ概念中ヨリ文藝、美術、音楽、演藝、映畫、寫真等ヲ抽出シ、藝文ト指稱シテ其ノ觀念ヲ明確ナラシメントス」

「我国藝文ハ建国精神ヲ基調トス、從テ八紘一字ノ大精神ノ美的顯現トス、而シテ、此ノ国土ニ移植サレタル日本藝文ヲ經トシ、現在諸民族固有ノ藝文ヲ緯トシ、世界藝文ノ粹ヲ取入レ織リ成シタル渾然独自ノ藝文タルベキモノトス」

・音楽に対する期待

【資料2】北小路功光「音楽随感」『藝文』第一卷第一号、1944、64頁

音楽は銃後の生活の単なる慰安であつてはならない。ちょうど睡眠が體力の恢復に役立つやうに、音楽も、戦争の生産の背後に何等かの役割を勤めなければならぬ。さう思ふと、勤労者に佳い音楽を聞かせると共に、勤労者自身も元氣を得るために音楽をやつて欲しい。それには合唱という音楽形式が一番いゝ

→支那事変以降、鐵道唱歌等の公募活動が活発化し、内地と同様の過程を辿る

3. 満洲固有の音楽の「発見」と「保存」

3-1 「大東亜音楽」の思想

・大東亜文化の区分：支那系・蒙古系・印度系・インドネシア系

（「日本文化は大東亜文化の中の單獨なる一つの系統ではなくて、今日に於ては實に世界的の大系統……即ち世界文化としての凡ゆる文化の集積綜合され……今日では獨特な日本文化が出来上がつて居るのであるから……他の四系と同等に並列することは大いに誤つて居る」田辺尚雄『大東亜の音楽』、1943、5頁）

1940年紀元二千六百年祝祭に際し田辺が中心となって東亜文化展を開催、東京科学博物館にて諸地域の楽器展示と実演、音楽に関する講演、映画上映を実施  
1941年にはコロムビアよりSP『東亜の音楽』発売、満洲雅楽二曲を収録

3-2 「礼楽」信奉と伝統音楽の復興

・外地音楽調査（植村 1997・2002）

1921年朝鮮、1922年台湾・沖縄、1923年中国・樺太・アイヌ、  
1930年代～満洲・南洋で田辺尚雄が政府の援助のもと音楽調査を実施  
満洲では寺院所蔵の鐘・楽器を調査し、奉天放送局の録音係を伴い現地音楽を記録  
→田辺の音楽観から、礼楽に特に比重を置いたものに

【資料3】田辺尚雄「満洲帝國と禮樂」1934、1～2頁

王道政治の極致は禮樂にあることは東洋古來列聖の遺訓であつて、孔子も亦た之を極言して居る……近く満洲國に於て即位の大典を行はせられんとす夫れ即位の大典は天下萬民をして天子の尊容を拝し、世界萬國をしてその威風を敬慕せしめる爲めのものであつて、禮樂整はずして何を以てか之を行ふを得んや。即位の大典には善盡し美盡せる禮樂を整備せしめることは最大の急務である

・満洲独自の音楽の模索

【資料4】浅川潜「満洲文化と夢(19)レコード音楽」（『満洲新聞』1939年5月3日）

大陸には大陸の音楽を而も大陸の文化向上に寄與すべき音楽を作製し、大陸をそれによつて指導し啓発して行くの信念が是非必要なのである……若しも、大陸に足場を固めた内地三大レコード会社が、お互に結束をして、眞に大陸のための音楽精神を生気あらしめば、民族協和の具現は言わずもがな、友邦満洲國の精神文化に、如何ばかり潑刺たる潤ひを與へ得る事にもなるであらう

【資料5】「満洲文化の構想（座談會）」『藝文』第二卷第一号、1945、90頁

金澤覺太郎「吉林の付近にも満洲古樂の團體があるが、生活のために百姓になつて了つて、ばらばらになつて居る」  
甘粕正彦「さう云ふものを新京音楽團の中に入れてらどうかね、生活の保證をやつて芽を伸ばしてやりたいね」  
金澤「それを復興し奨励し、歌舞伎を残した様に傳承して行かさせなければならぬ」

4. 満洲における日本音楽・西洋音楽をめぐる言説

4-1 「国民音楽」としての日本音楽の採用

【資料6】「満洲文化の構想（座談會）」『藝文』第二卷第一号、1945、87頁

藤山一雄「[藝文]協會の誕生で日本音楽と云ふものに多少の政治性が與へられ、國民生活への必要性を認めて貰つたことは何より嬉しい。これまでは西洋音楽よりも低視されて居た観がたしかにあつたのです。ところが、此の度のことで、花柳界から日本音楽を健康な社會に引き戻し、亦諸曲みたいにブルジョアといふか、ある特殊層から大衆に普及させる運動、更に師匠の音楽から個人のものにする、國民の音楽にし、民族の音楽にする希望が生じたのです」

【資料7】丸山和雄「無題」【藝文】第二卷第四号、1945

之「日本音楽の古典」を真に理解し鑑賞する精神的餘裕と教養は、今日共榮團の文化面の建設をも課せられた日本人のすべてが持つ可き精神的な一要素であると思ふ

新日本音楽でも宮城道雄《満洲調》中島雅楽之都《満蒙茫漠》等が作曲される  
→1934年のレコード検閲開始～「頽廃」音楽への批判の激化、愛国音楽の量産へ

4-2 短編小説「蓄音機」にみられる音楽観

『藝文』第二卷第一号（1945）掲載、青木啓著

（あらすじ）主人公の加木吾郎は満洲で妻と一男一女との四人暮らしをしている。部屋には僅かな俸給には似つかわしくないような立派な蓄音機があり、収入をやり繰りしながらレコードを蒐集してきた。ある日突然、吾郎はその愛着ある蓄音機を売り払うと言い出す。その理由は、美しい音楽を聴くことが、真っ黒になって働く妻や隣人から自分を隔離し、もっと「高尚」で「特別」な人間だと己惚れさせるからである。吾郎は現下の戦いと其の悲壮さを感じるほど、より素朴で純一なものに惹かれるようになり、「簡潔な軍歌の調べを美しいと」思うようになった。そして蓄音機を売ること、音楽にうつつを抜かず中性的な人間ではなく、軍人のように男らしい男になりたいと考える。

- ・主人公の設定：**社会的地位**「特殊會社の一社員」「現在では此の上もなく重要な工業部門に属する事業」「経理といふごく一般的な仕事」  
**教養程度**「私立大學ながら最高學府の出身」「内面のものをうかがつてゆくと、彼は所謂「知識人」の仲間に入れることが出来さうである」

・浪花節と「音楽」との対比

作中の「音楽」：クラシック（ベートーヴェン、ショパン、リスト、ドビュッシー）  
「音楽を聴いたそのあとで、僕は……鐵道の現場従業員であり、いつも浪花ぶしを唸つてゐる隣家の主人と、仲のいゝ隣人になることが出来ない」  
「自分は音楽の解る人間なのだ、浪花ぶしなんか嫌ひなのだと言つたやうな虚飾的な感情がありはしないか」

【資料8】永井荷風『断腸亭日乗（永井荷風日記）』1935年7月25日

今日浪花節は国粹藝術など、称せられ軍人及愛国者に愛好せらるゝと雖三四十年まえまでは東京にてはデロリン左衛門と呼び最下等なる大道藝に過ぎず、座敷に

て聴くものにては非らざりしなり

→愛国音楽となった庶民の浪花節に対し、高尚なものとして特権化されていた洋楽への批判を暗示か

- ・「音楽」を聴くことによる自己嫌悪

「軍人が一ばんいゝ。男らしくて。[息子には]どうも僕のやうに中性みみたいな人間にはなつて貰ひたくないからな」

「[応召された友人の] 鬼藤みみたいな男になりたくて仕方がないよ。やれ音楽だ文學だとか言つて、いつもふらふら宙に浮いてゐるのはいやらしいからな」

→クラシック音楽を鑑賞する主体のジェンダー化

4-3 反洋楽排斥論者による洋楽擁護

- ・ラジオ・オーケストラ関係者による擁護論

【資料9】苔米地貢「音楽と兵隊」（『朝日新聞』1939年4月8日）

從來洋楽と云ふとラヂオでは非常に分が悪かつたのです。投書にしても洋楽と浪曲では到底比較にならない程であり……「洋楽は亡國の歌である」など云ふ物凄く抗議も出てくる始末……彼等[航空隊のパイロット]に云はせると酒よりも何よりも洋楽をと云ふ大した要求なのださうです。隊長も最初洋楽なんぞと苦々しく思つて居られた相ですが……この頃では「洋楽はどうも棄らしい」と大ひに奨励されてゐると云ふ話なのです。これは兵士のみに限らず社會一般に當てはめられる原則の様に思はれて大變興味があります

ここでの「洋楽」：モーツァルトやハイドンのレコード

軍人と結びつけることによる洋楽の正当化

cf.) 映画『野戦軍楽隊』（監督：マキノ雅弘、音楽：大澤壽人、松竹製作、1944）

大塚淳からの賛同表明（「東亞の音楽」『満洲浪漫』第三輯、1939、209～211頁）

「世の狭量な排他主義者はこの偉大な事實の前に頭を下げることであらう」

「今や満洲國の政治家はこの點を認識して東亞の音楽は日本海を渡つて満洲國と共に絢爛と咲かうとしてゐる」

4-4 「敵性音楽」としてのジャズ

- ・音楽浄化運動の発生

【資料10】藤山一雄「大陸一題 爾、尚足らぬもの一つ」（『満洲新聞』1939年7月18日）

どうも此の頃のやうに幕間、ひつきりなしにジャズまがいの頽廢的な流行唄のレコードを鳴らされるのにはまことにうんざりする……ジャズは青年層に對し怖ろしい魅惑を持った麻薬である……保安警察は花柳病や阿片吸引更に大したことでもないフィルム、言論出版などの相当嚴重な取締以上に音曲、わけて最近のジャズソングの如き、その旋律に非戰論的音調を含み國民の士氣を暗々裡に消耗せしむるものには断乎たる処置をとって貰い度い。と同時に他面文教当局は宜しく健康にして純正なる音楽普及に對する一層の熱意と努力を示さるゝやう希望して止まない

藤山の主張が発端となり、「音楽浄化運動」として展開されるように

→治安部・首都警察・新京中央放送局・新京音楽院が参画

【資料 11】「音楽浄化は先ず放送陣から ジャズ音楽に代る満州国国民歌謡 中継・レコード放送に健全音楽を」(『満洲新聞』1939年8月12日)

新京中央放送局では、同局のスタジオから放送する歌謡曲は原則として“健全なる音楽”を目標にしてゐたが、時たま放送時間と時間のきれまにレコードを送るが、この中には往々にして戦時非常色に缺けてゐるものがあり、なんとかならぬものかと一般に要望されるにいたつてゐた……日本各地からの中継の折、所謂あくどいジャズ調のものもあり、今回音楽浄化運動が提唱されたのを機會に近く一切の頽廢色のあるジャズ流行歌の中継を廃し、これに變るに満洲國の國民歌謡をもつてなすことに大體方針が決定した、尚同放送局で二年前から週二回放送してゐる國民歌謡に對し國民歌謡唱歌集を作する案も有しており、音楽上か運動の一翼を擔ふのだと非常な意気込みである

むすびに

【主要参考文献】

- 石田一志『モダニズム変奏曲—東アジアの近現代音楽史』東京：朔北社、2005
- 岩野裕一『王道楽土の交響楽—満洲知られざる音楽史』東京：音楽之友社、1999
- 植村幸生「植民地朝鮮における宮廷音楽の調査をめぐって—田辺尚雄「朝鮮雅楽調査」の政治的文脈」『朝鮮史研究会論文集』(35)、1997、117～144頁
- 植村幸生「田辺尚雄と『東洋音楽』」浅倉有子・上越教育大学東アジア研究会『歴史表象としての東アジア—歴史研究と歴史教育との対話』大阪：清文堂出版、2002
- 葛西周「博覧会の舞踊にみる近代日本の植民地主義—琉球・台湾に焦点をあてて」『東

洋音楽研究』(73)、2008、21～41頁

葛西周「歌われた『美談』—音楽をつうじた近代日本のイメージ戦略」『演劇映像学 2010』第3集、2011、61～80頁

貴志俊彦『満洲国のビジュアル・メディア—ポスター・絵はがき・切手』東京：吉川弘文館、2010

貴志俊彦「東アジアにおける「流行歌」の創出—クロスオーバーするレコードと音楽人」和田春樹・後藤乾一他編『岩波講座東アジア近現代通史』別巻、東京：岩波書店、2011、313～336頁

喜多由浩『満州唱歌よ、もう一度』東京：産経新聞ニュースサービス、2003

古茂田信男ほか『新版日本流行歌史 中』東京：社会思想社、1995

大傍正規「届かないメロディー—日独合作映画『新しき土』の映画音楽に見る山田耕筰の理想と現実」杉野健太郎編『映画とネイション』京都：ミネルヴァ書房、2010、1～34頁

田辺尚雄「満洲帝國と禮樂」『東亜民族文化協会パンフレット第4篇』東京：東亜民族文化協会、1934、1～27頁

田辺尚雄『東洋音楽の印象』京都：人文書院、1941

田辺尚雄『大東亜の音楽』東京：協和書房、1943

戸ノ下達也『音楽を動員せよ—統制と娯楽の五十年戦争』東京：青弓社、2008

戸ノ下達也、長木誠司編『総力戦と音楽文化—音と声の戦争』東京：青弓社、2008

仲万美子「歌舞伎、文楽、能楽の大連公演(1935年)は誰によって鑑賞/支援されたか—現地刊行の新聞報道記事からみた分析」『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第28巻、2011

ポーブ、エドガー「戦時の歌謡曲にみる中国の〈他者〉と日本の〈自我〉」『ユリイカ』1999年3月号

ポーブ、エドガー「エキゾチズムと日本ポピュラー音楽のダイナミズム—大陸メロディを中心に」三井徹監修『ポピュラー音楽とアカデミズム』東京：音楽之友社、2005

細川周平「西洋音楽の日本化・大衆化 41 満洲」『ミュージック・マガジン』1992年8月号、154～159頁

細川周平「西洋音楽の日本化・大衆化 42 大陸」『ミュージック・マガジン』1992年9月号、152～157頁

四方田犬彦『李香蘭と原節子』東京：岩波書店、2011